

岩波
講座

日本文学史 第二卷 古代

初期万葉

田 辺 幸 雄

岩 波 書 店

初期万葉

田
辺
幸
雄

目 次

一 名称と範囲	三
二 作者と作品	七
三 史的背景——雄略朝前後	八
四 史的背景——壬申の乱まで	二一
五 作品と歴史——万葉巻頭長歌	二六
六 作品と歴史——有間皇子	三二
七 作品と歴史——天智天皇	三四
八 『記紀歌謠』との関連	三〇
九 今後の問題その他	三三
参考文献	三四

一 名称と範圍

初期万葉ということばが、いつごろから学界用語として話頭にのぼりはじめたか、を私ははっきりとつかんでいない。だがそれがある色合を以て語られるようになったのは、かなり最近のこと、戦後数年を経過して後であるように思う。戦争以前にも、この時期の諸歌が、たとえば高雅な味といったようなことばで讃えられる機会には、はなはだ多かった。だがそのころは大きく見て、『万葉集』第一期の歌という表現で、これらが一括されていたといつてよからう。沢瀉・森本両博士の『作者類別万葉集』は、そのすぐれた四分法によって、壬申の乱以前の諸歌を第一期の歌群としてたてた。この分類は、『万葉集』四千五百の歌を展開の相においてつかみたく志していた若い人々に好個の足場を与えたものといつてよく、かなり広範圍にわたって採用されるに至つたのである。

当時私はいろいろの機会に、四期中の一つの時期たる第一期の歌にふれたことがあり、それらの歌の文芸性に思をいたしたこともないではなかったが、この部分だけを特に強く見据えようという気持は起きなかった。そうした状態の当時、私は第一期の歌という言いまわしを最も適切なものに感じ、それ以外に他のどういふ言い方を欲するということもなかった。

多分、すぐれた学者の幾人かは、戦前においてすでにこの第一期が、作品と歴史とのからみあいという点で異常なものを持っている事実に気づいていたであろう。しかしそのことを論じようとすれば、かならず皇室にふれざるを得ず、事がひとたびそこに至れば、論者の運命はおのずから明らかであった。従つてこの期のこの重要問題は、明るみに出されず、古代の住居趾のように、深い土砂に埋められていたといつてよいのである。

不敏な私が、この期の特殊な様相に気づきはじめたのは、恥かしながら、昭和二十四、五年ごろからである。気づい

てみるとこの部分が、『万葉集』という大きな世界の中でも、ひときわ目立つ一地域だということが、まざまざと感ぜられるに至った。人麿以後の広く複雑な万葉世界とは、かなり違った色彩を持つ初期の一世界、という意識が強く私の心を占めるようになった。私はいつしか初期万葉ということばを使いはじめたのである。これが、誰かの用いていたものを襲用したのか、自分であみ出したのか、重要なことかも知れないが、今の私にはわからない。苦心して案出したという記憶は全然ないから、私の創案ではない。その反面、誰々の用いていたのがきわめて印象的だったからそれに従った、というおぼえもないのである。あるいは、どこかで一、二度聞いたのが、ある期間意識下に没して、この期の特殊さを自覚するに至ると共に、私の心中に湧き出て来た、といったところなのかも知れない。

昭和二十五、六年ごろ、私は初期万葉以外にこの特殊な時期の作品群を適切に表わすことばはない、とたく思うに至っていた。西郷信綱氏が昭和二十六年に出された『日本古代文学史』の中にこの語を用いておられたのが、私の記憶に残っている。二十七年七月に発表した拙稿「齊明天皇論」^[1]は、同年二月ごろに草したものであるが、その書出しに私は、「最近、初期万葉への関心が幾分高まって来たかに見受けられる……」と記している。初期万葉ということばもそれへの関心も、この時期にはもう、かなり広くゆきわたりはじめていたのである。

私は自分一個のことを少々くだくだしくのべ過ぎたかも知れない。しかしこの期の特殊さが強く自覚されるとともに、初期万葉なることばがいきいきした生命を吹きこまれて歩き出し、やがて学界用語としても落ちついて来たこの過程は、私個人が実感した事情である以上に、上代文学に関心をいだく人々の大部分が、経験したところなのではないだろうか。この『日本文学史』の古代に、「人麿」や「旅人と憶良」に並んで「初期万葉」が席を占めるに至った理由も、右の過程と無関係なものではなかったはずである。そしてこの時期の特殊さが、作品と歴史とのからみ合いの密度に見出される関係から、その点をいろいろな角度から追求することが、初期万葉探求の中心課題となることも、以上の経過から考えて、自然ななりゆきというものであろう。

さて、こうして通用されるに至った初期万葉の範圍をどう定めるべきか、であるが、私は一貫して、壬申の乱以前をもつてこれにあてるべしと考えている。すなわち、上記の『作者類別年代順万葉集』の第一期とまったく同じ範圍とするのである。ひところは人麿を初期万葉の中に含ませる意見が存したが、これは姿を消したようだ。壬申の乱以後人麿まで、つまり天武朝の諸歌を初期万葉の中へ入れる考えは、なかなか有力である。壬申の乱以前とこれ等天武朝諸歌との間の差違はそれほど大きくなく、それよりも人麿と天武朝諸歌との間のギャップの方が顕著である、という見地にそれはもとづくものであらう。たしかに一理ある見解ではあるが、私はこの点をつぎのように考えている。天武朝諸歌の主なもの持統天皇・麻績王・大津皇子・大来皇女等々の作品であるが、人麿とこれら諸歌人との間の差は、時期によるへだたりというよりも、むしろ人麿の強烈な作者像にその原因を求むべきものではあるまいか。

乱の前後の差違も小さいとばかりは言えない。比較に便利なのは、有間皇子と大津皇子とのばあいであらう。有間皇子のことは、この稿の中枢部で触れることになるうから、ここでは、『万葉集』に残されたその二首の歌詠が、謀叛事件のさなかに発せられていることをいうにとどめたい。大津皇子の事件は、天武天皇という大きな専制君主の死後、程ない時期にひき起こされた。この謀叛の内容はきわめてあいまいで、皇子が謀叛をくだてたことが発覚したので死を賜うたという、冷い記事を『日本書紀』に見るのみである。当然推測されるのは、これが皇位継承の問題に深くかかわるということである。天武皇后たりし持統天皇が、その子草壁皇子の地位をなんとかして帝の座に確保したく思う時、今は亡き自分の姉大田皇女が、天武天皇との間にもうけた大津皇子は、放胆な挙止といひすくれた文才といひ、そこにあつまる人望の大きさといひ、最も目ざわりな存在であった。天武天皇の死による宮廷内の動揺にのぞんでは、今こそその時と、背に腹はかえられず、持統天皇は機先を制して、大津皇子を一挙におとし入れてしまったものと考えられる。すなわちこの事件は、目ざわりな皇位継承候補者を、反対側が謀叛の名の下に葬り去ったものと考

うべく、その点で後述の有間皇子事件と一脈も二脈も通うものを持っている。そしてかけの力である持統天皇が、有間事件をいわば指導した天智天皇の気丈な娘であり、父のその時の処置をよく見知っていたことを思うとき、その感にはさらに深まるのである。

この事件のいたましい犠牲者大津皇子は、その死を前にして、「金鳥臨^し西^し舍^し」鼓声催^ス短命^ヲ、泉路無^ニ賓主^ニ、此夕離^レ家向^ツ」という「臨終」の詩を残し、「百伝ふ磐余^{いはれ}の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」(巻三・四一六)と辞世して、二十四歳の生涯を終えた。漢詩に見られる惻々たる悲傷の心、和歌の、死の境を目前にして澄み切っている心の表白は、ひきしまり整ったことばに支えられて、まことに見事な結晶を形造っている。これとならべてみると、有間皇子の「磐白^{いはち}の浜松が枝を」(巻二・一四二)「家にあれば筈^けに盛る飯^{いひ}を」(一四二)の両首は、この二首の本質をどう考えるにしても、大津皇子のばあいと、発想の基底ともいうべきものが相当に違っていると考えなければならぬと思う。これは、有間皇子がこの時十九歳で大津皇子は二十四歳だったから、といったことにもとづくものでなく、又個性の差などに帰せられるべきものでもない。相似た事件の渦中から相似た立場の作者によって、こうした異質の作品が生み出されて来るところに、私は時代による歌風の相違を認めたのである。

以上のようなことを主な理由として、私は初期万葉の末端を壬申の乱におきたい。このことに若干の問題は残るであろうが、乱後皇室欽仰の歌の澎湃としておこり来った事情などと考え合わせても、このことは十分うべなわれてよいと思うのである。

註

- 1 拙稿「齐明天皇論」(『万葉』四号 昭和二十七年七月、後『初期万葉の世界』に収載)

二 作者と作品

この時期の作者数は、『^{作者類別}万葉集』によると、約三十名を数えることができる。その中には時期所属のはっきりしないのが数名いるが、これは時代順に配列されていない『万葉集』の性質からいって止むを得ないことであろう。これらの作者群を便宜の上から次の三種にわけ、その『万葉集』所載歌を、国歌大観番号によって記すと、左の如くである。

A 天皇……雄略天皇(一・一六六四?) 舒明天皇(二・一五一二) 齐明天皇(七?・四八五・四八六・四八七・一〇?)

一一?・一二?) 天智天皇(一三・一四・一五・九二) 天武天皇(二一・二五・二六? 乱以後の歌略)

皇后……磐姫皇后(八五・八六・八七・八八・八九) 倭太后(一四七・一四八・一四九・一五三)

皇子……輕太子(三二・六三) 聖德太子(四一五) 有間皇子(一四一・一四二)

皇女……難波天皇妹(四八四) 輕太郎女(九〇)

王……軍王(五・六) 井戸王(一九)

女王……鏡王女(九二・九三・四八九—一六〇七は四—一四一九) 額田王(八・九・一六・一七・一八・二〇・四八八)

——一六〇六は四—一五一・一五五 乱以後の歌略)

B 藤原鎌足(九四・九五) 間人老(三・四或いは齐明天皇作か) 舍人吉年(二五二 乱以後の歌略) 婦人(二五〇) 石

川夫人(二五四) 作者未詳(一六六五・一六六六)

C 大伴安麻呂(二〇一 乱以後の歌略) 巨勢郎女(二〇二) 石川郎女(九七・九八) 久米禪師(九六・九九・一〇〇)

(一)をつけた作者名は、はたしてその作者のものと考えてよいかどうか疑わしいもの、番号の下にある? はその

歌が、他の作者のものであるという別伝や有力な説の存するものである。

このうち、Aは皇室関係の作者である。Bは皇族ではないが、皇族との直接関係において作歌している人たちにほかならぬ。鎌足は采女をたまわって作歌し、又鏡王女に答えているし、舎人吉年以下の三人は、共に天智天皇崩御に当って挽歌を作っている。作者未詳の二作は紀伊行幸の折に詠ぜられた。そしてCは右以外のものであるが、大伴安麻呂が孝徳朝の右大臣長徳の子であつたりして、皇室との関係はやはり薄くはないようである。

三つの中の主力はむろんAであり、Bがこれに次ぎ、Cは比較的微力である。これを要するに初期万葉の作者のほとんど大部分は、皇室関係の、それもその中枢部の人々から成っている。無名作者乃至民衆歌人といったものは、この時期にはまだ頭をもたげて来ない。むろん長期にわたつて繁栄した皇室という大きな宗族の広く複雑な流れの中に立たせてみれば、これらの作者たちは九牛の一毛というべきであろう。けれどもこれらの人々への理解を多少とも深めるためには、皇室を中心とするこの時期の歴史の探索が必要であることは、やはり動かせない。この期の終に近くにつれてそのことは、より切実な問題となつて来るのである。

三 史的 背景 — 雄略朝前後 —

さて、その範圍を壬申の乱以前とするとして、初まりをどのあたりにおくべきか、を考えてみたい。周知のように、卷二の初には「君が行け長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ」(八五)にはじまる五首の磐姫皇后歌があり、卷四冒頭は「一日こそ人も待ち吉き長きけをかく待たるればありかつましじ」(四八四)という、難波天皇妹の歌によつて飾られている。すなわちこれらは仁徳天皇の皇后及びその妹の作品として扱われている。仁徳朝が応神朝とともに、古代日本のごく早い時期の隆盛期を形づくり、それ故に万葉の歌がそこから見えるようになるという考えかたにも若

千の筋道があるかも知れないが、歌相からいってこれらの諸歌がそんなに古い時期の産物とはどうしても受取れない。『万葉集』第二期あたりの歌がこれらの人々に仮託されたという早くから考えられて来た見解に従うほかはあるまい。

これについて古いのが、巻頭の雄略天皇歌である。「籠もよ み籠もち……」(一)のこの小長歌は、その未定型の形式に示された古代風のおのずからなるリズムの雄健さからいっても、内容の大まかさから見ても、よほど古い時期のものたることを思わせる。雄略天皇その人と結びつくか否かは明言できないにしても、雄略時代の作品であることは、ほぼまちがいないであろう。そしてその次が「家ならば妹が手纏かむ……」(四一五)の聖徳太子歌である。さらに舒明天皇の代に至れば、天皇以外の人々の歌も急に増加して、和歌の季節に入って来たことを強く印象づける。

以上の実情から帰納して、舒明朝から壬申の乱に至る約四十年間を初期万葉の、いわば本期間ともいうべきものと見、範圍をひろげて考えるばあいには、これを雄略朝にまでさかのぼらせ、そこからの約二百年間をこれにあてることが、至当な取扱いであろう。仁徳朝にまで入りこむべきではないのである。

そこで、雄略朝以降の史的背景をここで瞥見しておきたいのだが、雄略朝そのものは、なかなか複雑な諸事情をふくみ持つ時期で、その全貌をつかむことは容易でない。それは倭の五王時代の最後をかざる期間であった。邪馬台国の女王卑弥呼が二四七年に死し、宗女台与が立って、その二六六年には使を晋に送ったのであるが、それから一世紀半の間、倭国に関する記事を中国の史書に見出すことはできない。五世紀に入るや、倭国は東晋に入貢し(四一三年)、四二一年には倭王讃の修貢した由が宋書に見えている。讃はこれを応神天皇に擬する説もあるが、大鷦鷯命の音と考えあわせて、仁徳天皇と見るのがおだやかであろう。以後四七八年にかけて、宋書には珍・済・興・武という、讃とあわせて五人の王の遣使が記録されている。すでに国家の基礎はできあがったらしく、これが大和國家から出ていることも疑を容れない。

広開土王碑によれば、四世紀末から五世紀の初にかけて、朝鮮半島はしばしば日本からの遠征軍にふみあらされている。一つの政府によって運営される軍隊があったからこそ、こうした大遠征も可能であったと同時に、このような遠征の結果もたらされる富や奴隷のために、政府はいよいよ強大になったという面もあろう。倭の五王はこうした国家の主権者であった。ふつう五王は次の天皇に擬せられている。讃(仁徳或いは応神)・珍(反正)・濟(允恭)・興(安康)・武(雄略)、がそれである。このうち雄略天皇はその没年が、『日本書紀』では四七九年、『古事記』によれば四八九年であるから、上表した四七八年と矛盾することなく、大泊瀬幼武天皇の名から見ても、倭王武であることはまちがいない。他の四天皇は、それぞれ在位期間がその上表の年とくい違うが、これは『日本書紀』の紀年の誤り——というよりは作為——を率直に認めるべきである。

倭王武の上表文には、その二、三代前の祖先が、王自ら甲冑をよろい山川を跋涉して、息つく暇もなく、毛人の国、熊襲、朝鮮の国々を次から次へと討ち従えていった事情が、いきいきした筆致を以て記されている。要するに、倭の五王の時代は、大和国家が未曾有の発展を記録し、それにつれて国内の組織にも大きな変化をきたした時期と見るべきである。以上のような対外的発展とともに、大和から周辺の土地への意欲的な開発事業が、仁徳朝以後数多くなされている。河内国の湿地帯が大がかりに干拓され、そこに数多の屯倉が設置せられ、それぞれの地方の有力な族長が、屯倉の税の管掌者として、倭政権の下部構造にくり入れられる、等の事情は、その顕著な実例にはかならない。厩大な仁徳陵が堺市の東にあるのをはじめとして、履仲・反正・允恭・雄略、即ち倭の五王たちの陵はいずれも大和をはなれ、和泉、河内に築かれている。この時期に設置された如上の屯倉は倭政権の新しい発展段階に応ずる経済上の基礎をなしたが、その背後には、五王たちの本貫の地としての大和国があり、それは古来からの形体たる^{あがた}泉の⁽²⁾世界であった。

いわば雄略朝は、大きく翼をひろげて新たな領土を経営しつつ、屯倉をひろげたり鍛冶部を掌握したりしながら、

国家を前進させていた若々しい時期であり、同時に又、^{あがた} 県の世界に安らかに呼吸する一面をも持った、特殊な一時期であつたようだ。『万葉集』の巻頭の歌は、こういう背景の中に浮かびあがって来るのである。

註

- 1 門脇禎二「倭の五王の時代」(『日本歴史講座』第一巻 東京大学出版会)による。
- 2 林屋辰三郎「大和」(『万葉集大成』第二十一巻 風土篇 昭和三十年 平凡社)による。

四 史 的 背 景 — 壬申の乱まで —

倭政権は呪術的なものの力を他国に印象づけながら、比較的是やく四辺を征服し、版図拡大とともに上述のような新方式によって支配態勢の整備をはかったわけであるが、このことは他の豪族の反感を買った点多かつたらしく、雄略天皇がその一代に果した数多くの殺戮行為の中には、そういうことから生じた摩擦が多くあつたようである。雄略天皇の死後、朝廷勢力は次第に五王時代のたくましさを失ってゆく。代つて大臣、大連などが力を持ちはじめ、物部、蘇我等の豪族が、曾つてない強盛さを誇るようになって来た。呪術的權威の影のうすれたことも、この傾向を強めている。天皇が死して後継者がなければいには、その近親の人をつれて来て帝位につかせることが多いが、これを執行する大臣や大連に重みが生じて来るのは、当然のことであつた。

清寧・顯宗・仁賢の三朝ごろ、右のような事情で皇室の威信は次第に低下し、悪行の^ぶ 武烈天皇を経て、継体朝に至ると、国の内外事情の紛乱は容易ならぬものになって来た。ことは朝鮮問題とからみあつて起つて来る。継体天皇六年(五一二)、大伴金村は百済の請を容れて、任那の四郡を百済に割譲し、不評をまねいたが、後このことは、物部尾^{ものべの} 輿によって弾劾され、金村失脚の原因となつた。同二十一年(五二七)には、南加羅の恢復をはかるべく、兵を率いて

任那に向つた近江毛野の軍を筑紫の磐井が遮る、という、重大な内乱を生じ、翌年磐井は物部麁鹿火によって討滅させられたけれども、この乱の発生には、容易に看過し得ぬ問題がひそんでいた。朝鮮進攻の基地となる北九州一帯がその数次にわたる徵発その他の被害に耐えず、族長磐井に率いられて自分たちを苛酷な取扱から脱せしめたい、という意図がここに存したようである。⁽¹⁾倭政権はこの乱の平定を機に、その全国的な支配体制をいよいよ強化することができたが、朝鮮問題についてはこれが大きな暗影とならぬはずはなかった。欽明朝に至り、任那の日本府は新羅に亡ぼされている。そしてこの期間は皇統の上にも混乱を生じ、内外まことに多事であった。

用明・崇峻の朝に、蘇我氏は物部氏を倒して勢力を大にし、天皇暗殺をさえ強行、推古女帝が立って、聖德太子摂政の世の中となる。朝廷の力は弱まり、蘇我の進出は、時の耳目をそばだたせた。太子の善政に時代は一応平靜に見えたが、背後の流れはやはり大きな渦ををまいていたわけである。そうした中に「家ならば妹が手纏かむ……」(四一五)の聖德太子歌が、その慈悲譚とともに記録され、初期万葉第二の露頭となっている。

太子について推古女帝がなくなると、その遺詔をめぐって皇位継承の紛糾を生じ、蘇我蝦夷はこの問題を自らに有利な状態に処理して、田村皇子を立てた。これが『万葉集』とは縁の深い舒明天皇である。このころ皇室の沈滞は最も甚しかったようである。時に六二九年であった。大きく言えば、雄略天皇以後ここまでの期間は、倭政権が保守的、消極的であった時代である。五王時代のあの草創のエネルギーは守成のそれに転じ、対外交渉にも昔日の押しの強さは見られず、国内態勢は着々とその全国的機構を整えてはいつたけれども、同時に、蘇我氏をはじめとする豪族の勢力争いが続けられ、皇室の威信は弱められる、というような期間であった。『万葉集』のこの朝の歌、「大和には群山あれど」(二)「夕されば小倉の山に」(一五一)「霞立つ 長き春日の……」(五)等が、概して温雅な、ものやわらかな格調を持っていることは、偶然ではないようである。

舒明天皇崩ずるや、その皇后が立って皇極天皇となった。蘇我氏は蝦夷の子入鹿が、その威父にまさるといふ強盛

ぶりである。聖德太子の子山背大兄皇子を討滅するなど専断のふるまいがこのころ特にはなはだしかった。この以前から中臣鎌子（後の藤原鎌足）は、蘇我氏討伐を思い立ち、舒明・皇極間の長子中大兄皇子に目をつけ、法興寺の蹴鞠を機としてこれに近づいた。鎌子はさらに蘇我山田麻呂を婚姻によって中大兄と結びつけることに成功し、三人は緊密に事をはこんで、皇極天皇四年（六四五）六月十二日、三韓入貢の日を期して入鹿を大極殿に斬り倒した。蘇我一族は急を聞いて参集したが、意気あがらず、敵方の説得によって解散し、蝦夷は自殺して、蘇我氏はここに滅びたのである。

中大兄皇子の一派は、皇極天皇の弟孝德天皇を即位させ、中大兄皇太子、鎌子内臣、山田麻呂右大臣とそれぞれの位置について、新たな経綸に乗り出した。いわゆる大化改新の諸条令を次々と発布し、あたらしい中央集権制の実をあげることに万全の手を打ったのである。孝德天皇はこのばあい床の間の置物に近く、新政権の内実には少しも触れていなかったらしい。そして、中大兄皇子の政局推進には、酷薄なかげがいつもまわりついている。入鹿が討たれたその年の九月には、古人大兄皇子の叛があった。中大兄と父を等しくするこの皇子の母は蘇我氏であったから、入鹿のいなくなった後は、その影がとみに薄らいだ。それにしても共謀者の一人が中大兄に自首すると、中大兄が若干の兵を遣して古人大兄を討ち取ったという『日本書紀』の記載は、あまりにも簡単すぎる。事実は目ざわりなこの異母兄を謀叛のように仕立てて片附けたのであろう。大化五年（六四九）、蘇我山田麻呂の事件が出来る。同族の日向が麻呂を中大兄に讒すると、中大兄は、入鹿誅伐の功臣であり右大臣であるこの山田麻呂に兵を向けた。大和国へ逃れた麻呂は、抗戦しようという長子等を制して自刎した。後にその赤心の証拠が見出されて、中大兄は後悔するのであるが、事件の底を流れるものは、古人大兄の時とまったく同じな、冷酷無残な空気である。

白雉四年（六五三）には、孝德天皇一人を難波において、一族をことごとく大和の京へ拉し去るという暴挙をあえてした。孝德天皇はこれにはなはだしい打撃を受けて病むに至り、翌年他界する。皇極天皇重祚して斉明天皇となつて

も、皇太子中大兄の黒幕的位置は動くことがなかった。そしてこの四年（六五八）、第三の謀叛事件、有間皇子の変がおこる。この件は後程扱うが、要するにこれも邪魔者として打払われた気の毒な孝德天皇の唯一人の皇子の悲劇である。皇子の二首の悲歌については、後程考えることにしたい。

有間皇子の事件を最後として、中大兄皇子から目ざわりなものに扱われていた有力者は、ことごとく地下に没し去ったといつてよい。そのころ朝鮮半島の事態はいよいよ急迫したものになって来た。新羅に侵略された百済からたびたびの救援依頼があり、黙視する能わずと、齊明天皇はその六年（六六〇）十二月、朝鮮出兵を決意して、難波に行幸、軍備を整えたのであるが、これに対する反対の声は朝野にあまねく、敗兆と目されるような現象が各所におこつて、国内は騒然たるものになっていた。国民にしてみれば、この思い切つた出兵が、阿倍臣をつかわしての大がかりな蝦夷征伐、肅清討伐の後であつただけに、受ける衝撃は一通りではなかつたのである。これ以上の人的資源徴発には堪えられぬという空気がみなぎつたのは当然である。

しかも一旦決められた遠征は、今さら取止め得るものでなかつた。齊明天皇七年（六六一）、多くの皇族を含んだ大船団は一月船出して、瀬戸内海を西に動いたのであるが、伊予国熟田津の出港に際して、額田王の「熟田津に船乗りせむと」（八）の名歌を生みはしたものの、何となく意気あがらない遠征であつた。三月には、^な娜の大津（博多の地）に到着したが、程なく病死人続出、七月下旬には齊明天皇がこの地に崩じている。それから中一年をおいた天智天皇二年（六六三）八月、遠征した日本の戦師は、白村江に唐の水軍と戦つてあえなく敗退、あらゆるものを失つてしまふ結果になつた。

その翌年まだ帝位に即かず称制していた中大兄は、^{おおしほのみこ}弟大海人皇子とはかつて、家部、民部の部分的復活をおこなつてゐる。敗戦の責任を追求して憤激やる方なかつたであろう豪族たちをなだめしづめるために打つた時宜的処置であ

ったわけだが、大化改新の精神からいえば、明らかに一步後退といふべきものであった。中大兄がいつ九州から大和へ戻ったかは、書紀に記載がないので明らかにしがたいが、天智天皇四年（六六五）九月から翌六六六年三月までの間と見てよいようだ。豪族たちの怒りを家部、民部の復活によってなだめ、ほとぼりのさめるのをしばらく九州で待つてから都入りしたのである。そして大和古京をめぐる有力者たちの存在がわが経綸にきわめて不利なりとさとするや、果決断行のこの頭首は朝野の反対を物ともせず、天智天皇六年（六六七）三月、近江国大津宮への遷都を強行した。この時天下の百姓遷都を願わず諷諫者や童謡が巷にあふれ、日々失火があったと書紀は記している。三輪山を包もうとする雲に向かつて熱い息をはきかけた額田王の長短一連（二七・一八）が詠み出されたのは、こういう物々しい空気の中においてであった。

大津宮に移った翌六六八年、中大兄は正式に即位した。これまでの称制期間を在位期間の中にいれて、この年を史家は天智天皇七年とする。近江朝の日々は、唐制を模したきらびやかな行事に飾られ、表面おだやかに、内面には多くの暗い影を藏していたようである。そういう伏流は、たとえば浜楼の置酒に大海人皇子が長槍を敷板に刺し貫くという突発事にもあらわれたし、宴が多すぎて時の人々が「天皇天命終りなんとするか」と言ったという七年七月の記事にも、それがうかがわれる。額田王と大海人皇子との蒲生野の贈答歌（二〇・二二）に見られる両者の、たぐいまれな美しいエネルギーの奔溢は、こういう伏流を背後にひかえてのものであったようだ。天智八年（六六九）には藤原鎌足が死ぬ。これは天皇にとって片手をもぎとられた以上の打撃であったろう。翌天智九年には、いわゆる庚午年籍が作られて、中央集権の足場の一つがりっぱに築かれたわけであるが、その月はまた、誣妄妖偽の言を禁断するという取締を発せねばならぬ月でもあった。

天智天皇と伊賀宅子との間に生まれた大友皇子は、このころ成人して、非凡の才を何かにつけて示していたが、次の帝位をふむものとして、これを皇太弟の大海人皇子に比する時、母の身分が采女であったという点もあって、やや

不利な状態をまぬかれ得なかった。しかも天智天皇はなんといっても我が子のこの大友皇子に王座をうけつがせたい。大海人は自然宮廷内で疎外される。このことがかえって廷臣の或る者たち的大海人への同情をおり立て、朝廷二分のきざしは、次第にはっきりしたものになって来た。十年一月には大友を太政大臣とし、蘇我赤兄を左大臣にする等、なんとかして大友を次の頭主として印象づけようとするような、無理な人事を発表している。大海人は完全に無視されてしまった。

その年の九月から病みはじめた天皇は、十月十七日、大海人を召して帝位を譲ろうと話を切り出すが、大海人は固くこれを辞し、管理する兵器その他をいさぎよく投げ出して、出家し、吉野山中に入ってゆく。舎人のつき従ってあくまで側をはなれぬものもあって、天下二分の形勢となったが、その年の十二月天智天皇崩御。世には不穩の童謡が流行して、吉野の大海人を支持するかに見えた。かくて翌六七二年、壬申の年、近江朝方の吉野襲撃を企図するらしい動勢を探知した大海人は、急遽、吉野を発って北進した。桑名から和^{わさみ}進へ進出して、東国の大兵力を動員、逆に近江へ攻撃の陣を敷いて形勢を逆転せしめたのである。一ヵ月にわたる近江、大和でのげしい戦闘は、すべて大海人方に有利に展開し、七月末、瀬田川をおし渡った東軍は、大津宮を焼き払い、大友皇子は長柄の山前に自剄して、壬申の乱は終結した。美濃から大和に還った大海人は明日香浄御原の宮に即位して、完全な中央集権の実をなしとげるに至ったのである。

、註

1 井上辰雄「磐井の叛乱と南鮮」『日本歴史講座』第一巻 東京大学出版会 参照。

五 作品と歴史 — 万葉巻頭長歌 —